永田正臣教授の追悼号発刊によせて

経済学部長　古　庄　　正

1985年11月15日午前10時30分，経済学部教授永田正臣先生は呼吸不全のため逝去された。「したいことが自由にできていい人生であった。お前たちにはすまないが何も思い残すことはない。」先生は奥様と娘さんにこう言い残して静かに息をひきとられたという。先生は経済学部にとってはもとより駒沢大学にとっても全くかけがえのない人だった。

先生は64年のその生涯の大半を駒沢大学の教員として生き，経済学部と大学の発展のために多大の尽力をされた。先生は長く学科主任をつとめ，学部長を補佐して学部の体制作りに骨を折られたが，とくに２期４年にわたる学部長在任中には教員の採用を公募制にし，カリキュラムの再編・強化と教授陣の充実に力を入れ，今日の経済学部の枠組みを完成された。また，３期５年にわたる大学院経済学研究科委員長の時代には，同研究科の整備・拡充を図られたのみでなく，全学の大学院委員会の代表として大学院の制度改革に取り組みそれを実現された。図書館長として図書館の活性化を図られたこともみのがすことができない。しかし，先生の最大の功績は教学権の確立とそれを基礎とした学園民主化の問題に真正面から取り組み，今日の駒沢大学の基礎を築かれた点であろう。

先生が赴任された当時の駒沢大学は，専任教員であっても専任給はなく，研究室もなければ研究図書も研究費もなかった。その上，学部自治のかなめとしての教授会さえなく，教員人事，カリキュラム編成，学生の身分等に関する決定権はすべて大学当局に握られていた。先生は，他大学の非常勤講師や嘱託として新聞社の論説委員をも兼務されていたこともあって，こうした大学の現状にすっかり絶望し，「白け切った気持ち」で日々を送られていた

が，経済学部に対する強引な人事の押しつけを契機として，また「この職場に身をおくものは自分の力で職場を改革していかなくては」という故吉沢文男教授の熱意につき動かされて，学園民主化の問題に立ち向かわれるようになる。

1965年5月，大学当局の妨害をはねのけ，教員有志による待遇改善集会が開かれた。先生は吉沢・富倉両教授とともに率先してその呼びかけ人となられた。大学史上初めてのこの集会は大学当局の圧力によって失敗に終わったが，その後の運動の起点となった。1968年3月，大学を誹ぼう中傷した文書を配布したとして，大学当局は事実確認もしないまま11名の学生の退学処分を教授と当局により構成される「連合教授会」に提案，これを強引に可決させた。後難を恐れてか貝のように押し黙る教授諸氏の中にあって，先生は毅然たる態度でその不当性を指摘し，当局の反省を促した。大学紛争を契機として「刷新委員会」が設けられ，その答申にもとづいて大学機構は大きく改革された。学部自治のかなめとしての教授会の設立もその一環として認められ，教学権は一応確立された。旧体制の維持・温存を最大限に図ろうとする大学当局の努力にもかかわらず，改革がこうしたドラスティックなものに結果したのは，その背後に改革は部分的な手なおしではなくあらゆる側面についてなされるべきだとする吉沢・永田両先生を指導者とする「駒沢大学民主化促進経済学部委員会」の強い要望や，文学部「語学専任会」の再三にわたる抗議があったからである。学部教授会の決議を背景に，一切の縁故入学の根絶を学部長会に提案し，四面楚歌の中でこれを貫き通されたのも先生であった。教学権の確立を実質的なものにしたい，というのが先生のねらいであった。先生の御努力が実って，いまではこれは全学的なものになった。1974年11月，紆余曲折の後にこの大学にも労働組合が結成された。当局の意をうけて直接間接に組合活動を妨害し，組合の解体ないし分裂をはかる学部長や有力教授のいる中で，先生は学部長の職にありながら一貫して組合を支持し，その成長に助力された。結成当初の組合が大幅賃上げを獲得したとき，先生は「われわれが20年かかってできなかったことを組合は1日でやってのけ

た」といって組合に感謝されていたのを思い出す。1978年9月の首脳人事の交替に端を発する宗学分離・学長公選問題についても先生は深い関心を示された。先生は図書館長として寄附行為改正委員会に参加し，改革のあり方について積極的に発言された。改革は中途半端であってはならない，というのが先生の変わらぬ主張であった。時には深夜までも激論の続く教授会に，病弱なお体をもかえりみず最後までつき合われ，長年辛酸をなめつくした一教員としての貴重な発言をされ，人々の感銘をよんだ。教授会と教職員組合の努力によって，1986年4月，宗学分離と学長公選制が断行され，学園の民主化はひとまず達成された。30余年にわたる先生の，あるいは先生を始めとする心ある先輩諸教授の苦渋にみちたたたかいを踏まえてのみそれは可能であったといわねばならない。

息つく暇もないような長年にわたる激務の中にあっても，先生は研究を怠り教育に手を抜くようなことは決してされなかった。並の人間ならばとっくにつぶれたであろうと思われるような最悪の研究条件にもかかわらず，寸暇を惜んで研究にうち込まれた。明晰な頭脳と持ち前の激しい気性がそれを可能にしたといってよいだろう。先生は故服部之総氏の勧めで若い頃から日本の経済団体の研究に取り組み，この分野の研究者として著名であった。初期の著作『経済団体発展史』（1956年　小藤書店）はわが国経済団体史に関する最初の通史的研究であった。先生はこうした通史的研究を踏まえて1960年代には明治期経済団体の中核としての商業会議所の史的研究に本格的に着手し，大著『明治期経済団体の研究』（1967年　日刊労働通信社）を完成された。明治期の経済政策の性格を商業会議所の物質的利害との関連で実証的に究明されたこの研究は，「わが国経済団体史に関する本格的研究」であり，「特筆すべき労作」（山口和雄教授）であるとして学界から高い評価をうけ，母校早稲田大学への学位請求論文ともなった。だが，先生の本来の御専門はイギリス経済史，とくにイギリス産業革命史の研究であった。早稲田大学政治経済学部在学中に小松芳喬教授の御講義をききイギリス経済史の研究を志された先生は，A．トインビーの名著『英国産業革命史』の翻訳を刊行（1951年　邦

光書房)，この分野の研究者としてスタートされたが，上記経済団体の研究に忙殺されたこともあって，その後の研究にはそれほど大きな進展はみられなかった。しかし，経済団体の研究に一区切りつけられた1960年代末以降全精力をこの研究に傾注し，その成果をたてつづけに発表してこられた。『イギリス産業革命の研究』(1972年　ミネルヴァ書房)，『産業革命と労働者』(1985年　ミネルヴァ書房) はその代表作であった。広範な文献・史料を駆使しつつ円熟した筆致で書かれたこれらの著作は，先生の御研究の到達点を示す秀作である。

先生はたぐい稀な秀れた教師であった。先生の「経済史」はその豊かな内容と論旨明快な点で昔から定評があり，経済学部の看板講義の一つであった。少々勉強ぎらいの学生でも，先生の「経済史」には興味をもち，よく分かった，面白かったというのをしばしば耳にした。明晰な頭脳と周到な準備がそれを可能にしたことはむろんいうまでもないが，たんにそれのみではなかった。先生は若い頃結核を患い右肺を切除された。そのため長時間にわたって筆をとることができず，原稿は奥様を煩わして口述筆記によらざるをえなかった。そしてこのことが，頭の中でよく整理してから話す習慣を自然と身につけさせたといわれるが，先生の御講義の分かり易さの一因はここにあったと思われる。学生に対する指導も人一倍熱心であった。とくにゼミ生に対するそれは懇切丁寧であった。疾くに時間は過ぎているのに，なお熱心に講義をされているお姿を拝見するたびに，私は適当にお茶をにごしてその場その場を切り抜けている己を恥じた。先生はまた人一倍学生を可愛がられた。学生に請われれば少々無理をしてでも研究会やコンパや小旅行に付き合われた。お疲れのようだから今日はお断りになってはとお勧めしたこともあったが，先生は学生が待っているだろうからといって出かけられていた。先生に対する学生の絶大な信頼は，かれらに対する先生のこうしたやさしい思いやりによるのだと思う。永田先生は駒沢大学が生み出した，いな，駒沢大学しか生み出しえなかった，人間としてもっとも質の高い研究者であり教師であった。われわれはこうした秀れた先達をもちえたことを何にもまして誇りに思う。

永田正臣教授の追悼号発刊によせて（古庄）

経済学部教授会は，当学部と大学に対する先生のかずかずの貢献に報いるために，1985年12月，駒沢大学記念講堂において学部葬をとり行い哀悼の意を表したが，今回『経済学論集』第18巻第１・２合併号を先生の追悼号として発刊することとした。先生の御冥福をお祈りしつつ，真理と学問を愛された先生の御霊前に慎んでこの論文集を捧げる。

1986年９月20日